

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 24 日現在

機関番号：37120

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2015

課題番号：26580089

研究課題名(和文) 初期近代英語における動詞の命題補部についての定量言語学的アプローチによる研究

研究課題名(英文) The English Complementation Patterns in the Early Modern English

研究代表者

藤内 響子 (Fujiuchi, Kyoko)

九州情報大学・経営情報学部・准教授

研究者番号：40270128

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円

研究成果の概要(和文)：不定詞と動名詞、およびthat節が動詞の命題補部として歴史的にどのような競合関係にあったのが調べ、それによって動詞の構造や性質を再分析することが可能であるか探るために、現代英語において不定詞や動名詞を補部に従える77の動詞を4つのカテゴリーに分類し、定量言語学的アプローチを用いて、初期近代英語期(1500年から1710年までの210年間)におけるそれぞれの発達の過程を調査した。その結果、カテゴリー毎に異なる発達過程が観察され、現在の用法の差に繋がる可能性を示唆する結果を得ることが出来た。

研究成果の概要(英文)：Studies of English complementation revealed that, while there is a degree of flexibility in the use of gerunds and infinitives in Modern English, a steady and general increase in the use of the gerund can be observed. This is one of several developments in complement patterns that have come to be known as Great Complement Shift, a term first used in print by Rhodenburg (2006). However, there are not many detailed observations reported on the systematic evolution of complementation in the history of English. This study observed the detailed changes in the patterns of the complementation in the Early Modern English; examining 77 verbs classified into four categories depending on the current usage, and observed their interesting behaviors that can bring about the differences of usage in Present-Day English.

研究分野：英語学

キーワード：定量言語学 不定詞補部 動名詞補部 大補文推移

1. 研究開始当初の背景

通時的にみれば、中英語の終わりから初期近代英語(16世紀から17世紀)にかけて、that節を従えていた多数の動詞が、不定詞や動名詞を従える方向に変化してきた歴史がある。Rohdenburg (2006) が the Great Complement Shift(大補文推移)と名付けた、動詞の補部の交替現象の一つであると考えられるものだが、本研究を申請した平成25年(2013年)当時、その詳細な過程はまだ余り明らかにされていない。

2. 研究の目的

英語において、ある文の補文の構造や意味を明らかにする事は、その文の一般的な性質を解明することにつながり、文法研究にとって重要な課題である。それゆえ、その歴史の変遷をたどることは、とりもなおさず、現代英語の構造理解に大いに資するものと考えられる。そこで、まず初期近代英語の文献を調べ、定量言語学的アプローチを用いてその詳細な歴史の変遷をたどり、特に不定詞の名詞的用法と動名詞およびthat節が、動詞の命題補部として、どのような競合関係にあったのかを調査したい。(更にその結果を考慮したうえで、それによって、現代英語における動詞の構造や性質を再分析する事が可能であるのか、また、英語教育教材の開発に応用できる可能性があるのかを探ってみたい。)

3. 研究の方法

調査は、現代英語において目的語に動名詞や不定詞をとり得る動詞を、次のように大きく4種類に分類して行った。

動詞の分類

You should **avoid eating** just before you go to bed.(寝る直前に食べるのは、避けるべきだ。)の例にみられるように、動名詞

を目的語としてとるが不定詞を目的語にすることは出来ない動詞で、admit, avoid, consider, deny, enjoy以下26の動詞について。

I don't **care to have** coffee after dinner.(夕食後にコーヒーを飲みたいとは思わない。)の例にみられるように、不定詞を目的語としてとるが動名詞を目的語にすることは出来ない動詞で、care, decide, desire, expect, hope以下23の動詞について。

a. I'll never **forget meeting** him.(私は、彼に会ったことを決して忘れない。)

b. Don't **forget to meet** him.(彼に会うのを忘れないでね。)の例にみられるように、目的語が動名詞の場合と不定詞の場合とは意味が異なる動詞で、forget, remember, regret, tryの4つの動詞について。

She **began to run/ running**.(彼女は走り出した。)の例にみられるように、目的語が動名詞でも不定詞でもどちらでもとれる動詞で、begin, cease, continue, hate, intend以下24の動詞について。

以上、合計で77の動詞を対象にした。調査には、コーパスとして1500年から1710年までの、個人の手紙や文学作品、哲学、裁判記録など様々なジャンルのテキストを含んでいる、Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English(PCCEME)を使用し、分析ソフトとしてCorpusSearch2、AntConc 3.2.1wを使用した。

4. 研究成果

Rohdenburg(2006)は、英語における歴史的な補部の交替現象をthe Great Complement Shift(大補文推移)と名付け、次のように5つの段階に分けて説明している。

・the rise of the gerund (both "straight" and prepositional) at the expense of infinitives (and *that* clauses)

- ・ the establishment of linking elements introducing dependent interrogative clauses (as in *advice on how to do it*)
- ・ the expansion of (subject-controlled, future-oriented) infinitive interrogative clauses at the expense of finite *wh*-clauses (e.g. after verbs like *hesitate*)
- ・ changes involving the rivalry between marked and unmarked infinitives (e.g. after the verb *help*)
- ・ the simplification of the relevant control properties resulting amongst other things in the demise or obsolescence of unspecified object deletions with manipulative verbs like *order*.

今回行った調査にもっとも関連があるのは、その一番初めの定義である、“the rise of the gerund (both “straight” and prepositional) at the expense of infinitives (and *that* clauses)”である。京都大学の家入氏は、*forbear* や *avoid* 等、否定の意味を内包した 11 の動詞の歴史的発達について詳細な調査を行った、Iyeiri (2010) において、この the Great Complement Shift を更に、the first complement shift と the second complement shift の 2 段階に分類し、前者を主に *that* 節から *to* 不定詞への移行、後者を *to* 不定詞から動名詞への移行と定義している。the first complement shift が最も顕著にみられるのは中英語後期から初期近代英語にかけてであり、the second complement shift は近代英語後期に特徴的に表れるとされる。つまり後期中英語から初期近代英語にかけて *that* 節から *to* 不定詞節への shift が起こり、後期近代英語において更に *to* 不定詞から動名詞への shift が起こったと考えられるわけである。したがって、初期近代英語においては、主に *that* 節と *to* 不定詞節に競合関係が見られ、また、後期近代英語における動名詞の発達の萌芽が観察されるのではない

かという予測が可能になる。

以上のことを踏まえて、それぞれのカテゴリ毎に調査結果を報告する。分析では、1500年から1710年の期間を50年ごとに4つに分け、Period1からPeriod4としてまとめた。Period1は1500～1550年、Period2は1550～1600年、Period3は1600～1650年、Period4は1650～1710年に対応している。

まずカテゴリ1の調査結果を報告する。英語における complement shift とは、歴史的に見れば動名詞補部が勢力を確立していく過程であると考えることが出来るのであるから、カテゴリ1の「動名詞を目的語としてとるが不定詞を目的語にすることは出来ない動詞」は、最も早く shift が完成に近づいた類の動詞である可能性がある。そうであれば、「次第に不定詞補部が定形節補部を凌駕していく」典型的な the first complement shift の様子が観察され、また、the second complement shift が起きるとされる以前の初期近代英語においても、既に動名詞補部の躍進が顕著に確認できるかもしれない。しかしながら、調査結果をみるとその予測は裏切られる。*that* 節に代表される定形節補部は、どの時代においても全体のほぼ七割以上をコンスタントに占めている。むしろ時代を経るにつれその割合を増しており、Period4ではそれまでの時代より一気に10%以上増加して全体の約84%を占めるに至っている。一方で、不定詞補部はPeriod1の約22%から加速度的に減少の一途を辿り、Period4では全体の6%ほどを占めるに過ぎないところにまでその割合を減少させている。したがって、この2種類の補部を比較する限り、明らかに the first complement shift に逆行した shift が生じているといわざるを得ない。

次に、不定詞補部と動名詞補部の関係について比較する。不定詞の補部が初期近代英語全体で39例であるのに対して、動名詞の補

部は合計で 23 例となっている。不定詞の方が少数では勝っているとはいえ、動名詞補部もそこまで遜色のない数字である。しかも先ほど述べたように、不定詞補部は加速度的に減少の一途を辿っていくのだが、逆に動名詞補部は次第に勢いを増していく様子が伺える。具体的には period1 では、不定詞 8 例に対して、動名詞 1 例、Period2 では、不定詞 22 例に対して、動名詞 8 例、Period3 以降では形勢が逆転し、不定詞 3 例に対して、動名詞 4 例、Period4 では、不定詞 6 例に対して、動名詞は 10 例となっている。これを見る限り、このカテゴリーの動詞においては、近代英語後期に特徴的に表れるという the second complement shift が、既に 1600 年頃から始まっていると考えることが出来るのではないだろうか。

構造別により詳細に比較すると、次のようなことがわかる。不定詞補部においては完了形や受動態といった複合形の例が比較的早期の Period2 に 1 例ずつ確認できるものの、それ以降の発達が見られず、単純な to 不定詞の用例も減少していることがわかる。動名詞は、the を伴わない、より動詞性を持った形が少しずつ増加し、受動態の用例が Period4 になって 2 例現れている。このように、動名詞は、それ自身が動詞性を獲得しながら、同時に動詞の命題補部としても勢力を拡大していく様子が伺える。定型節では時代を下るごとに that を伴わない型や what を使用した関係節、間接疑問文の使用に増加がみられ、使用頻度と構造の複雑化の両方に関して発達していく状況がみてとれる。特に Period4 で関係節や間接疑問文が発達していることから、この後の後期近代英語においても、更なる発達が見られるであろうことが予測できる状態である。

次にカテゴリー 2 を報告する。このカテゴリーの動詞は、「不定詞を目的語としてとるが動名詞を目的語にすることは出来ない動

詞」である。結果をみても、1500 年前後の早い時期から全ての時代において、不定詞補部が最も優勢な補部であり、コンスタントに全体の 5 から 6 割を占めていることがわかる。それに対して定形節の方もコンスタントに 3 から 4 割を占めており、時代ごとの相違があまり感じられない。一方、動名詞補部は 15 例だが、最初の 50 年間では出現数はなく、その後も不定詞補部の数十分の一程度しか存在せず、カテゴリー 1 の動詞とはだいぶ様相が異なっている。割合的にも、period3 以降は少しずつ増加の傾向を示すが、せいぜい 2% 台に留まっている。

次に構造別の分析結果では、不定詞補部は、数においてのみならず、かなり早い時期から受動態や完了形といった複合的な不定詞の補部を発達させてもいる。特に受動態が時代を経るごとに増加の傾向を見せ、最終的には 481 例中 42 例と、不定詞の全用例の 9% 近くを占めている。この種の動詞は、相当に早い時期に最初のシフトを終え、十分に不定詞補部を発達させることが出来ているようである。動名詞補部は数も少なく、複合形もみられない。加えて動詞によって偏りがあり、全 15 例のうち動詞 fail だけで、前置詞つきの用例を 9 例とっているため、それを除くと全体的には、更に動名詞補部の用例は存在しないことになる。定形節は Period4 で - that の用例が + that を逆転し、関係節の使用に増加がみられ、カテゴリー 1 の動詞ほどではないが、間接疑問文も発達させている。後続する時代を更に調査しなければ断定は出来ないが、早期に最初のシフトを体験し、不定詞補部を発達させる時間が十分にあったために、動名詞補部が後に発達する時期を迎えても、それをあまり必要とはしなかったのかもしれない。

次はカテゴリー 3 の動詞を報告する。このカテゴリーの動詞は retrospective verbs と呼ばれ、to 不定詞と動名詞の補部の間で明確に意味が異なる興味深い発達を遂げてきた

種類の動詞である。分析は、用例が存在しなかった regret を除く forget、remember、try の 3 動詞について行った。

圧倒的に多いのが定形節補部を取る用例であり、不定詞補部は、時代を経るごとに増加傾向を見せてはいるが、全用例を合わせても全体の約 12.71%程度でしかない。動名詞補部に至っては Period3 になって初めてあらわれるものの、Period4 と合わせても僅か 3 例のみしか存在しない。

カテゴリー3 を構造別に比較すると、不定詞補部はいまだシフトの影も見えない状態であるが、おもしろいことに、Period1 という早い時期に受動態の構造を持つ用例が存在している。僅か 1 例ずつではあるものの、Period4 においては完了形の用例も見られる。それに対して、動名詞の用例は、例えば の文のようなものばかりで、かなり未発達な状態である。

I hold my life you have forgot your Dauncing:
定形節の用例に目をやると、+ that の節と同数で間接疑問文の節が多いことと、- that の節が時代を経るごとに増えてきていることがわかる。

最後にカテゴリー4 を報告する。このカテゴリーに属するのは、「目的語が動名詞でも不定詞でもどちらでもとれる動詞」である。カテゴリー全体をみると、that 節に代表される定型節補部はどの時代においても全体の 4 ~ 6%前後に過ぎないことがわかる。最初の予測では、Period1 あたりは、まだまだ定型節にある程度は勢いがあり、時代が下るにつれて、不定詞補部との競合が見られるのではないかと考えていたのだが、Period1 の定型節の用例数は僅か 3 例と、他のどの時代と比べても最も少ない結果となってしまった。そのあとを見ても不定詞と競合する様子は観察できない。

最初から圧倒的多数を占めているのは不

定詞補部である。これを見る限り、少なくともこの 24 動詞に関しては、前述の the first complement shift は進行中の推移ではなく、初期近代英語以前にほとんど完成してしまっているような印象を受ける。

次に、不定詞補部と動名詞補部の関係について比較する。不定詞の補部に対して、動名詞の補部は初期近代英語を通して全般的に少なく、period1 では、不定詞 61 例に対して、動名詞 9 例、Period2 では、不定詞 123 例に対して、動名詞 4 例、Period3 では、不定詞 106 例に対して、動名詞 8 例、Period4 では、不定詞 224 例に対して、動名詞 16 例となっている。Period1 においては、割合が他の時代に比べて少し異なっているが、Period2、3、4 を比較すると、動名詞は僅かずつ増加し、不定詞は僅かずつ減少していることがわかる。これを見ると、the second complement shift は起きつつあると言えるかもしれないが、まだまだ萌芽状態であると言わざるを得ず、「近代英語後期に特徴的に表れる」という記述を裏付けているようにも思われる。

先ほど述べたように、Period 1 の結果だけはそれ以降の時代の流れとは異なり、一見すると動名詞の使用頻度が他の時代より高く見える。しかしながら、不定詞補部と動名詞補部の関係で period1 に他の時代の数値とずれが生じるのは、動名詞のせいと言うよりも、不定詞補部の用例数が他の時代と比較して少ないからだと考えられる。不定詞の項を時代ごとに見ると判るのだが、時代を経るにつれ、61、123、106、224 と Period1 と Period4 の間には用例数で 4 倍近い開きが観察されるのである。また、不定詞だけでなく、残りの補部も、それぞれ時代ごとに比較してみると、Period4 の時代に定型節も動名詞節も、つまり全ての種類の命題補部の使用頻度が、それまでの時代と比べて大きく増加していることがわかる。ここまでをまとめると、初期近代英語における補文推移においては、補部の

競合以外に、「単純な目的語とは異なり、命題をその内部に持つ補文の使用そのもの」が、定型、非定型とも一般的に認知され、使用機会を拡大していく過程も含まれているように思われる。

用例をより詳細に、構造別に分析すると、不定詞においては、Period4 の時代を中心に完了形や受動態といった、複合形がその頻度を増し、単純な to 不定詞の用例も増加していることがわかる。動名詞も、複合形はまだ見られないものの、定冠詞を伴わない単独での使用が増加している。定型節では、that を伴わない型や what を使用した関係節、間接疑問文の使用に増加がみられる。このように、使用頻度と構造の複雑化の両方に関して発達していく状況がみてとれ、この後の後期近代英語においては、更なる発達が見られるであろうことが予測できる状態だと言えるであろう。

以上、初期近代英語における動詞の命題補部について報告した。それぞれのカテゴリー毎にそれぞれの異なる発達の過程を観察することができ、非常に興味深い結果を得ることが出来た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

「初期近代英語における動詞の命題補部特に現代英語において不定詞および動名詞の補部をとる動詞についての定量言語学的アプローチ」『比較文化研究』第 120 号, pp.57-67. 2016 年 2 月.

「初期近代英語における動詞の命題補部特に現代英語において、動名詞補部はとるが不定詞補部はとらない動詞についての定量言語学的アプローチ」『九州情報大学研究論集』

第 18 巻, pp.63-74. 2016 年 3 月.

〔学会発表〕(計 2 件)

「初期近代英語における動詞の命題補部特に数種の補部をとる動詞についての定量言語学的アプローチ」日本比較文化学会 関西・中国四国・九州三支部合同研究会(高知大学)2015 年 8 月 29 日.

「初期近代英語における動詞の命題補部についての定量言語学的研究」英語史研究会(国際基督教大学)2016 年 4 月 9 日.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤内 響子(FUJIUCHI, Kyoko)
九州情報大学・経営情報学部・准教授
研究者番号: 40270128